

海軍の聖地慰霊の島を守るろう

太平洋学会理事

平間洋一

はじめに

本誌新春号に有志の中村賀津男氏の「太平洋島嶼国家の若者」の記事で、数年前から中国がミクロネシア連邦のトラック諸島（チューク、以下括弧内は現在の名前）の春島（ウエノ島）にあるザビエル高校の卒業生の中から連邦政府の高官の子弟を選び、授業料や生活費を支給し中国の大学で受け入れている。このまま放置するならば数年後には太平洋で最も親日的なミクロネシアの日本の遺産が消滅する危機を訴えている。本稿では、太平洋の島嶼国家と我が国の歴史的な関係を振り返りながら、ザビエル高校卒業生への支援を考えて見たい。



冒険ダン吉（講談社）

輸出で利益を得ると、学校や集会所を建設するなど民生向上や地域開発に貢献し、



マニー・モリ大統領

日本政府から勲八等瑞宝章を受賞し、現在、イザベルとの間に生まれた六男五女を中心に一族三千人以上（2006年の人口調査では日系2万人）の大勢力で初代大統領がトシオ・ナカヤマ、現第7代大統領が四世のマニー・モリである。

しかし、これより日本への親近感、いや敬愛が強いのが南洋群島（マリアナ・カロリン・マーシャル群島など）と戦前は呼称）の政治的・軍事的中枢であったパラオ共和国であろう。非公式の巷説であるが、月は日章旗の太陽と対をなし日本に対する畏敬の念の表れという。また、初代大統領がハルオ・メレメリック、五代大統領がクニオ・ナカムラであり、公用語は現地語と英語であるが、アンガウル州ではそれに日本語が公用語の一つとして採用されている。また日本語由来の現地語も多くバンゴウ（番号）、ベントウ（弁当）、ベンジョ（便所）、デンキ（電気）、デンワ（電話）ガンバレ（頑張れ）などがあるが、面白いのはブラジャーが「チチバンド」、日本では死語となったサルマタが男性だけでなく

女性のバンテイにも使われ、親が娘の座り方が悪いと「サルマタが見えるよ」と注意するという。また、パラオには日本の寄付ではあるが旧官幣大社南洋神社やペリリュー神社（南興神社）、アンガウル神社が再建されている。第6代大統領トミー・レメンゲサウは、2005年7月の記者会見で小泉首相の靖國神社参拝について「すべての人のために祈るのは正しいことだ」と支持を表明、第5代大統領クニオ・ナカムラは代理人を参拝させている。日本に増悪感情を持ち軍国主義などと吹聴している国は世界で中国と韓国だけなのである。

ミクロネシア連邦と海軍の関係を見ると、第一次世界大戦が勃発し青島に配備されたドイツ東洋艦隊（司令官シュペー少将）が青島を脱出して南太平洋で通商破壊作戦を開始し、同盟国のイギリスからシユペー艦隊の撃破を依頼されると、日本海軍はドイツ艦隊の利用を阻止するとの口実で第一南遣支隊（指揮官・山屋他人中将・皇太子妃殿下の曾祖父）の鞍馬・浅間・筑波、第二南遣支隊（指揮官・松村龍雄少将）の薩摩・矢矧・平戸を派出しマリアナ、カロリン、マーシャル群島を占領した。そして、大正6年にイギリスから地中海への駆逐艦の派

遣要請を受けると、講和会議でこれらの島嶼領有の承認を交換条件として地中海に巡洋艦1隻と駆逐艦12隻を派出し、パリ講和会議で日本の委任統治領となった島嶼群で、戦前は南洋群島と呼称されていた。

ミクロネシア連邦は東・西カロリン群島からなり、西端のヤンプから東端のコストラエまでの距離は2,550*、その間に大小607の小さな島と環礁からなる島嶼国家で、特にトラック諸島は対米海軍戦略上から極めて重要で、戦前は陸軍の満州の「生命線」に対し海軍の「海の生命線」と呼ばれていた。

支那事変が始まり日米関係が緊張すると、海軍は第四艦隊（第二次世界大戦では第八艦隊、次いで南東方面部隊）を配備し、主要軍事施設をトラック諸島の春島、夏島などに建設し最大の前進基地となっていた。しかし、昭和19（1944）年2月に米機動部隊の奇襲攻撃を受け、艦艇10隻、輸送船31隻がトラック環礁内で撃沈され、さらに地上施設、燃料、糧食、軍需品に甚大な損害を受け戦略基地としての機能を失ったが、米軍の上陸がなかったことは、住民を悲惨な戦争に巻き込むことがなく不幸中の幸いであった。

第二次世界大戦後の

ミクロネシア

冷戦時代にはソ連の太平洋への進出を抑止しようと、オーストラリア、ニュージーランドなどの南太平洋の16カ国・地域で、政治・経済・安全保障などで連携する南太平洋フォーラムを発足させた（2000年10月に太平洋諸島フォーラムと改称）。しかし、ベトナム戦争に巻き込まれたアメリカからの援助額が減少すると、フィジー、ソロモン諸島やツバル、トンガ、西サモアなどにソ連が接近した。1986年にはトンガ王国の皇太子（国防相）が訪ソし、翌1987年にはキリバス共和国と漁業協定を締結すると、アメリカや豪州、ニュージーランド、それに日本が援助を増額し、キリバスのソ連との漁業協定を1年で解消させた。

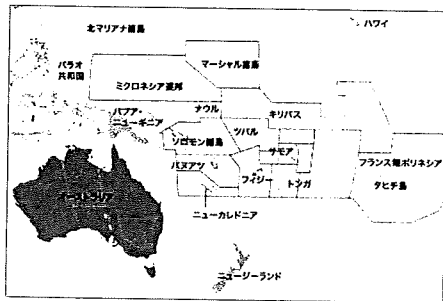
その後、中国が天安門事件の混乱から回復し、海軍力を増大し外洋進出を始めること、1989年に温家宝首相がフィジーで「中国・太平洋島嶼諸国経済発展協力フォーラム」閣僚会議を開催した。台湾と外交関係を持つパラオ、キリバス、ツバル、ナウル、ソロモン諸島、マーシャル諸島は参加をしなかったが、クック諸島、フィジー、ミクロネシア、ニウエ、パプアニューギニア、

サモア、トンガ及びバヌアツの各国が参加した。この会議で中国は今後3年間で30億元の優遇融資の実施、中国と外交関係を持つ国からの輸出品の関税撤廃などを宣言、このフォーラムで太平洋島嶼諸国と17に及ぶ協力協定や文書を調印、キリバスやナウルは援助に応じて、台湾から中国へと外交関係を変えた。南太平洋の小さな島嶼諸国は中台間の援助合戦―賄賂合戦に翻弄され、それが島嶼国家の政府を腐敗させ、再び部族対立を生むなど、民主化は阻害され治安も悪化してしまつた。

ミクロネシアと日本の安全保障

日本から遥かに離れたミクロネシアが日本の安全保障に関係があることは「太平洋諸島フォーラム」の歴史が教えている。「太平洋諸島フォーラム」を通じて日本の援助に新しい日米同盟のあり方があるのではないだろうか。ミクロネシアは米国と自由連合協定を締結しているが、財政難から援助も軍事的アクセスも減少している。太平洋島嶼で軍隊があるのはトンガ、パプアニューギニア、フィジーの3カ国だけ。数十人規模の海上警察で、2百海里の経済水域を管理することは不可能であり、中国が観光開発の名目で空港や港湾を整備した場

合、これが将来軍事利用される可能性を否定できない。日本が民族自決を尊重しながら、米国の庭であるミクロネシアを支援すること、日米関係を強化するのに最適な場所ではないだろうか。広大なEEZでの違法操業監視などの海洋管理を助け、災害支援に乗り出すとか、米海軍のプレゼンスが低下しつつあるミクロネシアへの支援を日本が戦略的に展開する時期に来ているのではないか。安倍晋三総理は今年から2年間をかけて南太平洋諸国を歴訪する方針を固め、その目的を遺骨収容活動の強化とするとしているが、9月の太平洋諸島フォーラム首脳会議への出席も検討していると新聞は報じている。



太平洋の島嶼国家

総理大臣の島嶼国家訪問は29年ぶりであり、中国海軍の太平洋への進出とも連動して経済的支援を強化し、

政治的影響を高めている中国の進出を阻止する観点から、日本海軍最大の前進基地であり、多くの英霊が海底に眠る聖地、大の親日国であるトラック島のザビエル高校留學生制度の募金に、水交会が立ち上がるとうとしていることを私は高く評価している。

ザビエル高校と私

私は、平成元（1989）年にヤップ、トラック、ポナペ、コスラエ州からなるミクロネシア連邦の首都が、ポナペの春木（パリキール）村に移転する式典に参加し、その帰路に春島と夏島（トノアス）を訪問した。春島滞在中に「マブチ・スクール」とも呼ばれるザビエル高校を訪問した。

ザビエル高校の校舎は、元は海軍の通信所で馬淵組（現馬淵建設）が建造したものであった。旧馬淵組は海軍とともに生まれ育った会社で、横須賀鎮守府や海軍工廠、横須賀と木更津両航空隊の各種建造物、南洋群島では大正3年にヤップの通信所を始めとし、サイパン、テニアン、ポナペ、パラオ、クエゼリン、トラック、ウオツゼなどに通信所や守備隊の兵舎・倉庫、飛行場などを建設し、トラック島には馬淵組の出張所があった。

一方、ザビエル高校は昭和28年にイエズ

「馬淵のAさん、Bさんはお元氣だろうか。宜しく伝えてくれ。私はCと言います」と言われた。

ス会が創設したミクロネシア初の4年制高校で、定員は一学年45名前後で生徒総数は147名、受験者が毎年千名を超える超難関高であり、卒業後はアメリカやオーストラリアの大学に留学し、南太平洋地域で指導的な役割を果たす人材を送り出して来た。私がザビエル高校を訪問したバコを吸っているか、と尋ねられた。「知っているよ、私が今住んでいる町にある」と答えると、

帰国後、早速、馬淵建設を訪問しマブチ・スクールの卒業生に月に10万円で良いから奨学金を出してくれないか。馬淵組の「誠実・技術・奉仕」の「馬淵スピリット」を発揮してもらえないかと、写真を見せながらお願いした。しかし、反応は鈍くそれから21年後の平成21年末に『馬淵建設百年史』が送られてきたことにより、馬淵建設がザビエル高校を修復し、平成20年10月9日に完成記念式典を行ったことを知った。社史には修復の動機は『朝日新聞』の「戦争の記憶―送信所、高校に再生」であったと書かれていたが、編集委員の一人から「平間先生の申し出を受けたときは、大変な不況でそれどころではなかったのです。しかし、その後に各方面からの働きがあり、創設百周年の記念事業として取り上げました」とのことであった。

もし、あの時に私の進言を入れて「マブチ奨学金」を出してくれていたならば、ザビエル高校のエリートを中国に横取りされることはなかったのに、悔やまれてならない。

（ひらまよういち 幹候8期）

第456定期講演会 25・12・19

派遣海賊対処行動

海上幕僚監部装備体系課長 下 淳市 1佐
鳴り物入りで開始された本行動も、定常業務と化した感がある。

第14次隊を指揮した講師は、もはや国民の関心も薄れ、新聞等にも滅多に載らない行動部隊の活動の実態を、ときおり本音を交え詳らかにした。



次第は、行動開始の経緯、編成、トピックス、活動の概要、アデン湾の状況、実績、成果、今後の方向の順。部隊は、すずなみ、きりしまの二艦、海上保安官8名を含む約400名。昨年12月から本年6月までの行動で、31回、124隻の護衛を達成。4年前の開始以来の実績は11月末で518回、3300隻に上るとの由。その甲斐あって海賊事案は激減しているという。

他方、国防を担う集団として、本来実施すべき訓練、要員養成等がおろそかになりはしないか、本行動の定常化がボディブローのように、突如としてその牙を剥くやも知れぬとの思いが過った。

（野井広報委員記）



ザビエル高校（1989年）中央に立つのが筆者